

「いざなぎ景気」からの学び —当経済研究所の足跡—

第4代経済研究所長 水尾 順 一

筆者が当時の田中経済研究所長から所長を引き継いだのが2006年4月。その頃日本経済は景気の回復・拡大に向けて堅実な歩みを示していた。2002年2月から続いた景気拡大の波は、2008年2月までの73か月間の長きにわたり、以前57か月継続した「いざなぎ景気」を抜いたことから「いざなぎ景気」と呼ばれた。

だが、実質GDP成長率はそれまでのいざなぎ景気（8%前後）やバブル景気（4%前後）よりも低く、1%そこそこの低調な状態がつづいた。多くの国民はニートやフリーター、「勝ち組」と「負け組」、格差社会など、景気拡大とはほど遠いのが現実の実感であった。景気の拡大を通じて一般庶民が安心して豊かな生活ができる雰囲気は感じられないとの声が多く聞かれたものだ。

その後も、サブプライム問題に始まる世界同時不況の影響をうけ、2008年9月15日に発生したリーマンショックで日本経済は急激に悪化した。

こうした時代背景を受けてか、企業の不祥事も相次いだ。ライブドアや村上ファンドなどは時代の寵児ともいわれるベンチャー企業であったが、負の遺産を排した。

また、社会が成熟化する一方で消費者の価値観も変化し、ミートホープ、船場吉兆など、食の安全・安心が問題となり、防衛省の汚職や年金問題、居酒屋タクシーなど、行政の不祥事も後を絶たなかった。

さらに、環境問題も世界レベルで重要なテーマとなり、洞爺湖サミットでの地球温暖化に対する日本が果たすべき役割も真剣に議論された。

経済研究所では、こうした社会の価値観の変化を真摯に受け止め、2008年3月に経済研究所としてチームマイナス6%に参加し活動を進め、産官学連携の駿大フォーラムにおいても、「森林文化都市」飯能を基盤として、環境問題を重要なテーマの一つに掲げて多彩な研究活動を繰り広げた。

また、講演会ではそれぞれテーマを掲げて実施した。たとえば混迷する

政治・経済・社会を「歴史に学ぶ」ことをコンセプトとして、「江戸の遺伝子」と題して、財団法人徳川記念財団理事長・徳川宗家18代当主の徳川恒孝氏の講演、さらには渋沢史料館館長の井上潤氏から、「現代に生きる渋沢栄一～受け継ぐべき思想と行動～」と徳川・明治の2つの時代を念頭においた講演会である。

一方、現場からの学びも経済研究所としては重要なテーマであった。「横浜赤レンガ倉庫～年間500万人が訪れる商業施設の開発と経営～」と題して横浜赤レンガ前代表取締役社長・村澤彰氏からの学び、そして落語家三遊亭金兵衛氏と津軽三味線の太田家元九郎師匠から、「知と技の伝承と革新」に関する芸術・芸能の現場からの学びもあった。

今回所報の15年という特集が組まれた。一つの時代を回顧することは明日への歩みを生み出すことにもつながる。現在は高垣研究所長にその役割を受け継いでいただいたが、今後共歴代の経済研究所の活動を礎にして、さらなる15年、30年、50年と知の蓄積を祈念してやまない。

2012年 5月